

2023年11月10日

熊本県知事 蒲島 郁夫 様

清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会 共同代表 岐部 明廣
7・4 球磨川流域豪雨被災者・賛同者の会 共同代表 鳥飼 香代子・市花 保
子守唄の里・五木を育む清流川辺川を守る県民の会 代表 中島 康

「球磨川水系山田川河川整備に関する説明会」(9/30) をめぐる申入れ

日頃は県民のためにご尽力くださることに、敬意を表します。

2021年11月4日以来、私たちは蒲島知事に対し、球磨川流域豪雨災害において何が被害を拡大させたのかを探るための共同検証の申入れを断続的に行ってきました。二度で終結した球磨川豪雨検証委員会では全く言及されていない、支流氾濫のメカニズムや第四橋梁問題といった被害拡大要因が、私たちの独自調査（現地を歩き数百名以上もの被災者に体験談を伺い、数千枚に及ぶ映像の収集・解析）により、明らかになったためです。

しかし県は、2020年10月時点のデータを根拠に共同検証を拒否し続け、その信憑性を証拠づける客観的事実も未確認のまま国交省のデータを鵜呑みにして独自調査すらしていません。こうした事実は、2023年3月13日申し入れ時の職員による発言から明らかになっています。にもかかわらず、同6月20日人吉市中心市街地復興まちづくり協議会安心・安全部会で県は、私たちの指摘を無視して国・県の従来通りの資料を、説明に用いました。同7月14日に私たちは再度、災害当日の映像データを提示して国・県が固執する説明は被害拡大要因の分析が不十分の極みであり私たちの指摘に対する誠実な回答を行なうよう改めて申し入れましたが、県は八代河川国道事務所ウェブサイトのFAQを繰り返すのみでした。私たちはこれまで、FAQにある説明文は論理破綻していることを、撮影時刻の明らかな映像を複数お示しするなどして、伝え続けてきました。7月の申し入れからは、県はこれまでの議論の経緯すらともに把握しようとせず、流域住民との協働する気など皆無かのような対応に終始しました。

さらに9月30日に人吉市で開かれた「球磨川水系山田川河川整備に関する説明会」では、山田川の氾濫を「バックウォーター現象の影響により、合流点付近の水面勾配がほぼない状態で水位が上昇し、氾濫が発生したと推定」し、堤防護岸の崩壊をめぐるメカニズムもほぼ不問のまま、河道形状を変え堤防天端に道路を確保し堤防の表層のみ石積みすることで氾濫や崩壊を防ぎ良好な河川空間を形成できるという、理解不能な主張を展開しました。理解不能という強い言葉を使わざるを得ないのは、推定の妥当性・合理性を示す体系的・客観的データが皆無であることにくわえ、なぜ山田川のこの地点の堤防が崩壊したのかそのメカニズムを不問にしたまま、川沿いの堤防天端を道路にするという、防災面からも合理性・妥当性に欠ける提案をしていたためです。このとき、山田川流域で田んぼダムを進めていく旨の説明も、なされました。

私たちはこれまで、「双方向コミュニケーション」を重視し「流域のあらゆる関係者が協働して行う川づくり」を標榜する熊本県を信じて、繰り返し次の点をお伝えしてきました。球磨川豪雨災害における氾濫と被害拡大メカニズムは、本流からのバックウォーターのみでは、説明できません。

とりわけ山田川をめぐっては、上流域の開発や連続堤防、鬼木川との合流点以降の川幅や形状の影響をめぐり検証は不可欠だと、私たちは繰り返し求めてきました。仮にこの論に固執するのであれば、その発生メカニズムを明らかにする一次データを、県は被災者や流域住民に対して示すべきです。

以上を踏まえ、下記データを11月10日に開示いただくよう、申し入れます。

記

1. 山田川の河道形状を変えただけで、山田川のみならず球磨川の土砂さえも流下する（堆積しない）という検証は、いつどこでどのように行ったのか。その時の具体的なデータを提示せよ
※これは説明会資料にある「推定」で済まされない、流域住民の生命に係る重大な問題である。市街地を流れる山田川に求められる課題（＝管理者である県河川課の最も重要な課題）は、少しでも多くの洪水が流下することのできる川づくりである
2. 山田川流域で水田が占める割合を提示すること。そのうち、たばこ栽培の割合も必ず提示せよ。球磨川豪雨災害時に山田川に降った雨は山田川の水位上昇に何cmほど寄与したのか、解釈の妥当性を示す資料も併せて、提示すること
3. 「まち空間が融合した良好な水辺空間の形成」「賑わいある水辺の創出」とあるが、賑わいある水辺を求める市民の声について、どのような実態把握を行なっているのか、提示せよ

以上

問合せ先：

手渡す会事務局長 木本 雅己